# 企業主導型保育所における子育て支援に関する研究
## ―親と子の主体性育成を目的とした講座開発を中心として―

大阪芸術大学　初等芸術教育学科　特任教授　寺田 恭子

**【研究目的】**

本研究は、大阪市西淀川区にある A 企業主導型保育所（以下、A 保育所）における子育て支援に関する実証研究である。子育て不安や負担感の軽減、虐待予防、さらに不登校やいじめ、ひきこもりなどの二次障害を予防するための、保育者が取り組む「しつけ」講座の開発と、その効果検証が主な目的である。内容としては、これまでに取り組んだ動画を A 保育所などの保育専門職スタッフと共に再編し、入園時に親に紹介する講座を開発する。研究全体の枠組として、子どもの主体性の起点である親の「子どもの主体受容」を促すために、保育者が「親の主体を受容する」という家族システム理論をベースにしている。子どもの自尊感情・自己肯定感の育成を目的として親の自己肯定感を育てる。親が前向きに子どもと向き合い子育てを楽しいと感じ、幸福感、心の充足を感じる講座の開発を本研究のねらいとしている。

**【研究の背景】**

企業主導型保育所は、都市部で問題になっていた待機児童解消のため、平成 28 年（2016）に内閣府が創設した 0～2 歳までの保育所である。自社の従業員だけでなく、地域の企業や個人などが共同で設置・利用するために施設整備費や運営費を国が助成する保育事業である。A 保育所は、体調不良型病児保育も実施しているため、常勤者の保護者が多い。長時間労働のため、子どもの発達や子どもとの関係性に不安を抱く保護者も多く、わかりやすい理論と日々の子どもとのかかわり方を具体的に紹介して欲しいという要望が A 保育所では多く出されていた。

**【研究方法】**

本研究の柱となる動画の再編と講座の開発については、A 保育所が属している NPO 法人 B 法人（以下、B 法人）の専門職スタッフが「ゆりかご研究会」（以下、「研究会」）を立ち上げ、研究代表者と共に研究内容を検討することになった。子どもの自尊感情を大切にしたしつけ＝「ゆりかごラーニング～楽しいしつけの提案」(2017)を再編し、子どもだけではなく親の自己肯定感の育成など、0～2 歳児の子どもを育てる保護者に寄り添う視点をもつ講座開発を可能にするために、「研究会」専門職スタッフの視点を重視した。

**【研究の結果】**

1. コロナ禍のもと、「研究会」は、計画通りに開催することは難しく、4 回（6 月 26 日、7 月 17 日、9 月 18 日、1 月 29 日）の開催となった。

研究会には専門職スタッフ（保育士 5 名、看護師 1 名）と研究代表者（筆者）の計 7 名が参加し、A 保育所施設のホールで行った。

2. 「ゆりかごラーニング」動画（2017）を内容ごとに 17 のセクション動画に分けた。それぞれの動画は、どのような意味をもつ内容であるのか、を保護者にわかる言葉で説明することによって、以下の 3 つを講座のねらいに据えた。

①親と子の自己肯定感を高めるために
②子どもが幸せな人生を送るために
③親と子の絆を深めるために

3. 1 回の講座を大体 60 分と考え、3 回構成とした。それぞれ、親の質問、疑問という形でテーマ設定をした。

第 1 回講座　なんで、親が子どもに語りかけないといけないの？なんで、楽しく前向きになるように語りかけないといけないの？

第 2 回講座　どうやって、子どもの自己肯定感を育てたらいいの？

第 3 回講座　親と子の絆を深めるためにどんなことが大切なの？

4. 子育て支援者であれば誰でも講師ができるようにパワーポイントを作成し、そこに動画を埋め込む形にする（以下、「新ゆりかごラーニング」）、またパワーポイントに合わせたシナリオも作成する、保護者は複数で受講するので、ワークをする時間を設定し、保護者同士の関係性を円滑にすることによって親の自己肯定感を高めることを目指すことを確認した。

5. 多くの先行研究により、親の養育態度や言語が肯定的だと子どもの自己肯定感は高くなることが明らかになっている。保護者ワークの課題として「肯定的リフレーミング」を示すだけではなく、A 保育所スタッフ全員が保護者と子どもたちに対して、肯定的リフレーミングや肯定的言葉がけを意識することを確認した。つまり、保育者が保護者の主体を受容することによって、保護者は子どもの主体を受容できるのではないかという家族システム理論にそった考えである。

6. 肯定的とは反対の否定的感情や言葉がけについても、保護者グループワークとして取り組むことを確認した。幸福感や心の充足感の感情的指標となる「要求」や「期待」を題材とした内容である。

**【今後の研究課題】**

来年度 4 月に向けて「新ゆりかごラーニング」の最終調整を完成し、A 保育所保護者会での講座をしたいと考えている。同時に、B 法人内にある障害児通所施設の保護者会でも「新ゆりかごラーニング」の講座を開きたいと考えている。定型発達児であっても障害児であっても人の主体性のありようは同じであり、子どもの主体発達は、親の子どもの主体受容からスタートするからである。親と子の自己肯定感を育み、親が子どもと向き合い子育てを楽しいと感じることができること、幸福感、心の充足を感じることができること、その変化を計る調査票を作成したいと考えている。